538
72

始

25

詩集

壁

今井俊三

大正
14. 2. 21
内交

538-92

序詩

まだ粗塗の
それは新しい壁である
所詮　樂書すらもできない塗面である
まして雨風を防ぐことは

思ひもよらない、が
よくよくその面を見るとき
ほんのおぼろ氣にでも
なにかの影が映つてゐるとしたら
それこそ、微かながらも
誰かにとつて
ほんたうの喜びに相違ない。

目次

疑惑の窓
見知らぬ街……三
探究……七
夢を盗む人……一一
機會……一五
虚げられる欲望……一九
鳥……二五

ステッキ……二七
幸福……二九
眼病……三三
五月の夜……三七

雨ばれの風

三月を……四三
初夏……四五

秋……四九
秋……五一
秋のあさ……五五
九月の夜……五九
煙突の下……六一
忘却へ……六五

挨拶

あいさつ……六七
拾ひもの……七一
姿見の前に……七五
初夏の風船……七九
煙草……八一
顔と足……八三
唄……八七
踊……九一

冷たい話……九五
娘ら……九九
逃避行……一〇三
孤獨……一〇七
ひとり燻らす煙草……一〇九
搖曳……一一三

壞れた別莊

笑ひ……一一五
海は覺えてゐる……一二一
足……一二五
秋の家……一二九
壞れた別莊……一三三

粗壁

詩想……一五一

ガラス戸の外……一四三
殺戮……一四五
スケルツオ……一四七
蛇……一五三
客間……一五五
田舍……一六一
田舍……一六三
私は消費する……一六七

渡舟……一七一
氷を砕く……一七五
吾等つねに知れるや……一七九
そも何處へ行つたのであらう……一八三
淋しすぎる春……一八七
坂道を行く……一九一
書簡箋……一九五
存在……一九九

音信……二〇三
一輪挿……二〇七
烈風の日……二〇九
記憶？……二一五
花辨が食べたい……二二一

疑惑の窓

見知らぬ街

いつ乘込んだともない灰色の大きい船は
言葉の解らない波止場へ私を揚げてしまつた
たつた一枚の古い地圖をたよりに
私は街の方へ不安な足を運んで行く

街は思つたよりもさびれてゐて
雨上りの夕空には
無愛想な風が吹いて居り
見すぼらしいこの放浪兒に
一ぽいのスープをよんでくれる店すらない
こんな街に投出されてはどうして鄉愁を感じない者が
あらう
けれどもそれは夢のやうな記憶でもあり

或は單の幻想であるかも知れない
そんな故鄉を私はもつてゐたのだらうか？
あてどもないことを思つて
あてどもなく彷徨(さまよひ)歩く見知らぬ街でも
やはり時は經つてゆく
やがて日も暮れやう、夜が來てしまへば
この暗い街では地圖も不要になり

歩かうとしても歩けなくなるだらう
さうしたらいつそ私は
眠つてゐる人の扉を叩いたりせずに
何處かの大きい塵埃箱のなかで
ゆつくりと一休みしやうと思つてゐる。

探求

一發の銃聲！
おそらく
それが「最後の一發」であらうか
儘かな手應……

と、目ざすものは微かな音をたてゝ落ちた、

あゝ幾度か
「熱望」と「焦心」の彈丸が
空しい沼に沈むだかを

仄暗い森林を
もう道先案内の犬もなく、

遙かな窓から望み見た
かの風景は何處へ行つてしまつたか

泥に重つたゲートルを引き締め
今朝薄氷を踏むで
なほも私は
彼方の心當りへと
それを探しに

出かけるのであつた。

夢を盗む人

夜な夜な
細心な手袋と覆面——
かくして懐をかゝへ

息せき切つて
街々を離れたとき
それは思ひもよらぬ
廣々とした空地へ出た
ほつとして四邊を見まわしたとき
地平線の彼方でするどい銃聲が鳴つた
盜人は發見された！

双手を胸にあて、
疲勞を取返へしながら、
この折角の獲物の處分を思ひ煩ひながら、
追はれながら、
――おれの偸まうとしたのはこんな夢だつたのだらうか？と
盜人の心は始めてそれを知つた。

機會

（退屈した人はよく出かける）
私も糸を垂れてみる
まつ正直なうつけさで

見えぬ糸の先端から
手應は　ぴりりッ
からだ中にかんじられた

慥かなだけに
揚げしぶつてゐて
つい――、
糸は風に搖れてゐる。

朱い浮標のぐるりに立つ
ゆるやかな水の波紋から目をあげて
私はまた四邊の風景を眺めわたす。

虐げられる欲望

お正月も過ぎてしまつた今日
私はどつさりとお菓子を買込んでしまつた
それに春衣もちやんと着けて來たけれど
どの部屋の扉も閉つてゐる、

——招持狀は？と訊ねられたら
それこそ困つてしまふのだけど——

（しかしこのホテルは立去るには余りにきれいだ）
さう思ひながらいつのまにか
私は自分の部屋に歸つてゐた

退屈まぎれに、持ち歸つたお菓子を喰べてゐる中に

折角の着物をつい汚してしまつた
——なぜおれはいつもこんな失敗をやるのだらう、
汚れた着物の個所をながめて
つくづく自分が厭になつた。

鳥

何處かで
啼きごゑがする
ちかごろ
こんな啼きごゑを聞かない

けれど　どこか微かなおぼへはあるのだが
そればかりで
なほさら探してみたい心地がする

あてどもなき夜空を眺めよとて
それらしい梢のかげもない。

何處かで、
啼いてゐる
そのこゑがわたしの耳を離れない
ほんの微かながらに漂つて來る

鳥のすがたさへも分ぬのに
わたしの耳はこゑをきいてゐる
なにかこのこゑをきいてゐる
ひようひようと

なほもきこへてくるこゑ。

ステツキ

初夏の宵ごろ
瀟洒な銀握りのステツキを
振りまはして歩いて見たが
それほどでもなかつた

あのウキンドの中にあつたとき
こいつには
まだ何かついてゐたに違ひない。

幸福

やつ！　といつて飛び付いた
男の鼻柱から血がたらたらと流れた
生あたゝかい晩だつた
あの男は近眼だつたかも知れない、

翌朝　私が尋ねて行つたら
頭を白い布でぐるぐる巻きにして出て來た
その背後に見知らぬ看護婦が一人付いてゐたつけ
――氣分は？　ときくと
――あゝ今度來てくれた女は大變親切でねといつて
にやり笑つてゐた
彼奴にとつては傷のことなんかどうでもいゝらしい
するとやつぱり彼奴は

うまいことをやつたのか知ら？。

眼病

遠ざかつてゆく窓の
ずつと列んだ一線に
白い瘤がひとつくつついてゐたつけ、
だんだん小さくなつて行くのが

おれにはたいへん氣がゝりだつたので
なにくそつと力まかせに
段梯子を踏みしめてやつた
目の下ではらはら搖いでゐるものは
ペンキ塗の板ばかりだと思つたら
先刻の白い瘤が
大きくなつたり、小さくなつたり
とうとうその日から

おれは怪しい眼病にかゝつてしまつた。

五月の夜

ざわざわと陽氣な晩だよ
町には屹度きれいな女達が出てるだらう
明るい呉服屋の店先に
粋な化粧品店のウキンドに
ら

白い活動小屋の木戸口に
それともちよいと薄暗い細道か、
なんだかうれしい晩だよ
みんなそんなやうな顔をして歩いている、
いつたい何があるのだらう
ほんとうにいゝことがあるのかしら、
みんないそいそぶらぶら歩いてる
女も通る男も通る

ざわざわと陽氣な晩だよ
肌觸りのいゝ五月の晩だよ
みんな陽氣に歩いてる
なんかいゝことがあるのかしら?。

雨ばれの風

三月を

硬ばつた腕(かひな)をのばして
私は三月を掴まうとする
重い夜着の下から
深く包まれた胸を

もりあげ　もりあげ
私は三月に觸れやうとする

あゝ三月！
それは近くに見えてゐながら
手觸ることの出來ない
望遠鏡で眺める
淡彩の風景である。

初夏

來た！と思つたら
もう眼の前に
愉快な明るい顏をして
「初夏」は立つてゐた

目醒めるやうなグリーンの背廣に
花模様の洒落れたネクタイ
この男はいつも好い香りをあたりに漂はせて水々しい
夫さん貴女も肌觸りのいゝネルを着ましたね
お嬢さん
柔くなつてうれしい指が
鍵盤の上で踊つてゐますな
さて若紳士諸君

これから私は諸君のお友達です
秘した戀があつたら
かまはずどしどし打明けなさい
また新妻を迎えた方は
びろうどの芝生の上もいゝでせう
着たいと思ふ衣服は精々たんとお召しなさい
今のうちですよ
やがて私は、諸君の纏ふてゐる衣服をすつかり剝いで

諸君を水邊へ置去りにしてしまふでせうから。

秋

秋はすつかりヴエールを脱ぎ
やゝ微かな悔ひをおびて落ちつきはらつた女だ
羞らひを越えて短夜を
狂樂(くるひ)あかした後朝

疲勞とともに醒めた心地
ひそかに窓から拔け去つた
戀人の移り香
それさへつめたい風にさらはれさうだ
何處かで忍音のこゑがする……。

秋

筒拔けしたやうな秋の空
平手でとんと押しやつた
桶を叩くやうな秋の景色
ぼんやりと歩いてゐるうちに

私は一本の木になつてゐた
赫土のじめじめした香を嗅いでゐると
私は一つの石塊となつて
阪道をごろごろと轉つて行くのである
いつの間にか側にゐた戀人とも離れてしまひ
指は懷中の詩集の頁を繰ることさへ忘れてしまつてゐる
無心に眺めあかす眼(まなこ)から

やがてはすつかり秋に吸込まれてしまふのである。

秋のあさ

街は片かげ　秋のあさ
小ぎれいな　理髪店の店先
晴ればれと姿見も澄む

砥ぎすました剃刀は
そら色に光る

泡だつしやぼんの
香ほりのたゞよふあたり
大理石の冷たさ滑らかに泌む
爽やかな健康のよろこびが

打ち水にしめる舗道を
踏む旅人の
日和下駄の歯の下にひゞく

威勢よく電車も走る
自轉車も馳る
秋に乘じて動くものゝ敏捷さ。

九月の夜

みんな疲れをおぼえそめてゐるのか
九月の夜
秋はまづしい營みのつきか
夜更けてものを洗ふ音がする

どこまで沈むでゆく空氣か
眼を閉ぢて參禪してゐるのか人々。

煙突の下

赤松の幹ほどの煙突が
すつくりと立つてゐる
澄みきつた秋日和の空
都會の町外れの日曜の午後

見下ろす家々の内からは
さゝやかな物音が聞こえるが
向ふの工場の煙突からは
淡く、濃く、けむりが流れ出る
けむりは青空へ樂々と流れ出る
あのけむりの行く先は
賑ふ今日の公園の方か
それとも程遠い海岸だらうか

焦らずけむりは流れ出るが
ゆつくりと聳える煙突も
この日和に、眠りをもよほすだらう

目まぐるしい時の隙間へ
追拂ふことの出來ない
ゆめが忍び込むで
蒸暑い煙突を拔けいでゝ

高い空へ流れゆくであらうか
はればれとした
あの青空の方向へ――。

忘却へ……

絹の靴下を穿いたり
びろうどの服を着てみたり
美味さうな煙草を吹かしたり
綺麗な机掛をかけたり

その上で日記を書いたり
やけに本を集めたり
思出したり
忘れたり。

挨拶

あいさつ

話しかけやうとすると
あちらを向いてしまふ
私への微笑ではなかつたのか、

呼びかけられたから
振返へると誰も居ない
私のそらぎきだつたのか、

まあなんと久振りだらう
「こんばんわ」と云つてくれた
「なあに？」とたづねたら
お休みなさいましとも言はなかつた、

ずいぶん永いお話ですねえ
いや氣候不順で
お天氣のあいさつばかりしてゐたのさ。

拾ひもの

初夏の宵で
街は人通りにざわめいてゐた
ちよいとした病上りの氣分で
ふらふら歩いてゐる私の足下に

妙なものが落ちてゐたのだ
ふとそれを拾ひあげると——
去年の春の頃
都會の雜踏の中でも
見たやつとそつくりだつたので
私はあつかましくも
獨身者の氣輕さで
——といふ心持もなく立停つたのだ

（拾ひものをした人のふとしたうれしい心理でさ）
が觸つてみるといくぶん冷やかで
その後が少しほとるやうな趣がないでもなかつた
——おれにはどうせ緣のないものだが——
呟きながら私はまたそれを
そつと路傍へ人知れず置いて過ぎたものだが
さておれの方がおいてきぼりを喰つたのぢやないかし
らと思ふと

いくぶん情ない氣がした
實際、一度拾ひかけたものは
二度と手にするものぢやない
妙にのどの乾く晩だつた。

姿見の前に

始終かゞみを前に置いて
自分の面でも見てゐないと頼りないのです
時々は異つた面が映ることもありますが
いつのまにかそれはまた

私のものに變つてゐます
そんな時は　きつと
しかめつ面をしてゐます

待つて、待つて、待ちあぐむで
煙草をあまり吹かしたので
とうとう舌がこんなに荒れてしまつて
何をたべても

さつぱり味がわからなくなつてしまひましたよ。

初夏の風船

いそいそと地球もめぐる
青い初夏のまつ唯中
精力と慾望とを一ぱいに朶むだ
風船玉がふらふらと思ひ上つて飛んでしまつた

陽氣すぎる風が香りのいゝ
煙草のけむりまでうすめてしまふよ
工風を凝らして閉めた部屋のドアも役に立たない
浮きたつてゐる此奴の尻には
よほど重い分銅でもつけておかなきあだめだ
まあ頭の輕い尻の重い此奴の樣子を見給へ
なんだかこの時候には不似合ひなものが出來てしまつ
たではないか。

煙草

幕間に二三分の夢、
おまへの氣まゝな嬌態
おまへと接吻してゐる人の心地は

それぞれ異つてゐるのに
いつもおまへだけは
さらさらとさばけてゐる
おまへは人々のいちばん奥の
秘密を嗅いで　さて
悠々と消へさる妖女だ。

顔と足

暗い晩の四つ辻に
まつ白な女の顔が
空中に浮んでゐた

女の兩方の耳の側で
けたゝましいベルが鳴ると
その首がぐるぐる廻りだした
（だんだん四邊が明るくなつてきた）

音が止むだところで廻轉も止むだ
よくよく見ると　惜しいかな
背中の上に顏がある

そこで女の胴體は
ずんずん遠のいて行つた
相變らず顏だけはこちら向けながら。

唄

うすぎたない居酒屋から
めくらが　ひとり　ふたり　さんにん
みんな酔つてゐる（いゝ氣持に）

——それではまた明日會ふことにしよう
きつとだぜ　あの橋詰で——

さむぞらに　凍つた月が鋭い
ふたりのめくらは心地よさに歌ひだす
——アノおおりよつこう……
指先で探ることもできない
亂れた調子を亂るゝまゝに　たゞ

月の光——いや酔心地
物音の途絶えた町にどらごゑ　かなしい身振り

——ではまた逢はふよ　がそれは
いつの日　何處でかわからない。

踊

——あれあなんだい
白いだぶだぶしたきものを着て——
あなた、今少時こゝにゐて下さい

これから十八番の幻想即興曲を踊るところです
何故そんなにぞろ〳〵歸つてしまふのです
舞臺にゐては鼻が高いとおつしやるのなら土間へ下りて演ります――かまふことはない

あゝなんといふことだ
だれも居なくなつてしまつた
したがこの衣裝もだいぶんくたびれてきた

無暗と明るいこの劇場はどうだ
まるで電灯づくりのお寺のやうだ
おゝ寒い！
寒さ凌ぎにどれ、ひとつ
先刻のつゞきを踊らうわい。

冷たい話

ふとへんてつもない時に
窓の隙間からまひこんできた
雪のかけらのやうな話
はなしてゐるひとは

横目でちらりと眺めたので
それが白いのは見えても
火鉢に手をかざしてゐたので
聽者(きゝて)の頰にとまつたものが
その冷たさが
心のしんまで泌みわたつたのを
つい感じなかつた

——むかしむかしお爺さんとお婆さんとがありました
なんと罪のない話者(はなして)であることよ。

娘ら

住み馴れた町に居れば
こもりがちな家の娘らとも
いつしか見識るやうになる

途で逢へば
眼が走り
さしつかへない女(ひと)は
あいさつする

忙(いそ)がしいこの世で
ながい話はできない

朝のあいさつから——
夕のあいさつまで
——あゝ夕べのあいさつを交すことの出來る女(ひと)は幾人
殘るであらう——

もつとも手輕なあいさつ
「さやうなら」とも言はずに
消えてゆく娘らのかづ

娘らよ
君がたは
仄暗い觀工場に點る
蠶の洋燈である。

逃避行

夜ごとの密會に
もう飽きあきしはじめてからだいぶんになる
煙草の吸殼のやうになつて
床に仆れるからとて伏息は來ない

この町をこつそり人知れず
逃れて行かう
それが第一だ　さうだそれがいちばんいゝ
あの山近い村の古い繪本を繰返へして見やう
それにはもう何の心配も遠慮もない
山といへばそれはどつしりとした厚い壁だ
草臥れきつたこのからだを
もたせかけるにはどうしてもあれに限るのだ

春淺い陽と山との間に坐つて私は
悠久の煙草を吹かして暮さう。

孤獨

また歸つて來たな
幾度突き返してやつても
外らかしても
夜中どの窓から　忍び込むのだ

冷血類のやうな
きさまの眸と見合すと
このおれは半身水につかつてゐるやうな氣がするのだ

(なんだか四邊が騷がしい
おれはへんな夢を見てゐるのかな?)

ひとり燻らす煙草

どうもこの部屋は寒いで——
まづ明るい窓掛を垂れ
朱色の火鉢を据えたり
その他いろんな器物を並べてみたが

朝の目醒には
あいさつの聲もきかれず
それらの器物の上には
埃さへ積つてゐるやうに見え
終日　私は部屋の中を
あちらこちら散歩したり
ふと固い椅子の上に暫く坐つたりして
ほとほと夜が待たれるのである

さて夜になつてみればひとしほ
痩細つた指に　夾むだ煙草を
ひとりで燻らすのはいゝが
たちこめる煙のなかで
せつかくの飾ものまで
かすかな色に褪せてしまふのである。

搖曳

きさらぎの陽が
照つたり陰翳つたり
わたしの片頬で
鈍いまたゝきをつゞけてゐる……

お光に失礼

——野蕃人のやうに、そんな言葉の
何處が可笑しかつたのだらう
二人は耐えかねた怪しい笑聲をたてつゞけた

お互の瞳のうちに
お互の戀人を探し求めてはゐるが
想は、はるかな野にさまよふ
痩犬の孤影(すがた)を浮べてゐた——

また雪溶けの風が
障子越につめたい
あらい葉摺れの音に動かされて
水が騒いでゐる。

壊れた別荘

笑ひ

異樣に笑つて
笑ひ崩れて
ふともちあげた顔
眼には不思議な

涙が……
夕方　雨のけぶる二階
あのひとづまの顔――。

海は覺えてゐる

秋のはじめの海邊に行つたことがあるか
其處には人かげもない
さざめきも　笑聲もない
人の歩いた足跡を

波は完全に消してしまつてゐる
だがよく聽いてみよ
その波を　あの周圍かまはぬ高話をきけ
夏の間を無邪氣に戯れあかしたひとびと
彼等はみんな家へ歸つてすましした面でゐるが
海はよく知つてゐる、
波はよく覺えてゐる、
ひとびとは忘れつぽくあるが

海は彼等の胸深くさぐりを入れてゐた
波は彼等の足跡をすつかり呑んでしまつてゐた
あゝひとびとは今年の夏を
跡方もなく忘れてしまふであらう――が
海は覺えてゐる
海は忘れない。

足

芝生の上
投げだした四つの足
白足袋のつゝましい先は
赤土に汚れ

露はなあしくびの肌には
はかなく白い埃が――

ものも言はず默つてその爪先を
見つめてゐる眼には
果知らぬ遠里に湧く
泉の一滴

ぽたりと落ちた足の上。

秋の家

燈火は消えた
潮は去つた
飛去る鳥の後影に
慌しい夏の別離を見る

潮に焼けた肌を
あちこちと遊びあるいてゐた心を
薄いレースの窓かけを
もう藏ひかけてもいゝ時だ

それには靜かな家を一つ
こつそり建てることだ

家の中では燈火を低くして
指先を清めよ、清めよ
さうしてこれらの品物を
ていねいに調べて見やうではないか。

壊れた別荘

——私は古びた別荘をもつてゐる——

春です
別荘の芝生はうらうらと
青に萠え初めました
潮が澱んで渚に足跡をかぞへる午後

私が其處を通つたとき
私は華かな笑聲をきいた。

夏です
潮の高い香りが漂つて來ます
夜は惱ましい紺青の空
月ある宵は渚に白銀の鎖がさゞめく
私が其處を過ぎたとき

私は樂しげな歌をきいた。

はや夏も逝きます
あの海の疲れた色
あの風の嘆くやうなうそぶき
——おゝお前ともお別れなのか！
呟き乍ら別莊を見上げたとき
もう彼の窓から光は洩れて來なかつた。

秋です
別荘の芝生は黄ばみ
物悲しい雲の絶間から
うすら陽が屋根の瓦に洩れかゝる
私が其處まで來たとき
私は頭上に松籟をきいた。

秋も暮れかゝる

物影は途絶へ石も冷たくなつた
別荘の門に鐵柵は錆び
深く閉された窓は沈むでゐる
忍び足に私が其處をぬけたとき
私は私の跫音をきいた。

さはれ　折々には
彼の別荘を思ひいづるまゝに

疲れた足どりで
私はさびれ果てた海邊の別莊を訪れる
いま　廻廊の欄干は朽ち
七ッの石階は壞れてしまつてゐる
たとひ其處に冬、寂滅の影が
潜むでゐやうとも。

粗壁

詩想

雨だれの音をきゝながら
風邪の熱にやむでゐる……
この詩想は、

いつたい誰がまとめてくれるのか
無理に眠つたとて
明日になつたら
またこの衣服はばらばらになつてしまつて
私はなほさら
寒いおもひをしなければならない。

ガラス戸の外

ガラスのむかふは
寒いといふことを知つてゐますか
みんな笑顔を大切に

藏つてゐるのだことを知つてゐますか

壁だと思つて
どんと突きあたると
幕の向側へ轉げ込みますよ

にんげんの眼なんてほんとうに
足の先についてゐればいゝのに。

殺戮

その夜
白い指先は朱に染つて
慄えてゐた……。

あはれにも
思ひ切つた殺戮が企てられ

蒼々と生びた芽は
毟り取られ
地は露はな肌をさらしてゐる

いま　石工の振りあげた

重い鐵槌の柄は固く握られた。

スケルツオ

暗い岩を掘り下げる
念入りな根氣のよさも
なるほど結構だが

あゝ　いつまで——

こんこんとして
岩かげを流れる水を　ときには
この陽の下に遊ばせやうではないか

さあ
スケルツオをやつてくれ

陰翳つたところは
四分の三でおどりぬけやうよ。

蛇

——さうしてだんだん獨りぼつちになつて行つたのだらう

鋭いその眸だけ見てゐると

なるほどおまへは冷たい

「彼奴の逼ひまはる道はわからない」つて——
そんなことを云つた奴はとうに死んでしまつたよ

だからさ　何處へでも
自由氣まゝに行くんだ
シツカリ首をあげて

その細い舌で　なんでもかでも
この空つぽのなかを
嘗めまはすのだよ。

客間

——これは大へんご立派なお部屋でございますなどう
も——

（あの厳しい肖像畫の後ろんところの壁が見たいもの

だ）

——この見事な絨毯は何國産でございませうか、いづれペルッヤとか？——

（定めしこいつをヒン捲つたら
いろんなお客が落して行つた埃
いつぱい吸込んでゐるのだらう

他日女中が日向ではたいてゐるのを見て
此家の主婦は驚いた聲をたてるだらう
「まあ大變なほこりだこと」つてさ）

この室中で　いつもかも
おんなじ動悸打つてゐるのは
棚の上にすましてゐる
あの置時計ぐらひのものだらう。

田舍

どうも大へんな埃だ
眼をつぶつて歩かうよ
いつ通つても
この古い時計店では同じレコードばかりかけてゐるし

往來で煙草の火を借ることもできない
それに黄色い聲をたてゝ
何かをひつたくり合ひしてゐるので
危險くてうかうか近寄れないぞ

なぜおれはこんなきものなんか
着てゐなきやならないのだ？

田舍

これは不味い料理だ
これは下手に仕立てたズボンだ
どれもこれも埃を被つた

昔の玩具店
虎も　獅子も　狼も
みんなかなしい張子の同列

あちらやこちらの片隅で
喰ひ殘りを嚙つたり
生(なま)ものを腹いつぱいに詰込んで
暗くなると寢込んでしまふ

陽が上ると營養不良の胃をごろごろ
抱へて、相變らず歪むだズボンに
足を突込んで斜な方向へ
一心に歩いてゆく。

私は消費する

物質の家庭から
精神の家庭への途すがら
私はつい道草を喰つてしまつた。

精神の家の夢を見た翌日に
きつと私は空腹を覺えるのだ
漂浪として夢を喰つて
精神の家から追放された背後で
私は微かな歌聲を聞いた
それらは古い歌の節で何の興味をも起させなかつた。
かつて憧憬を抱いて過ぎた路を見遣つて

私は老年を感じた
——青春は夢であつた——と
數知れぬ紙片がひらひらと
虚空へ舞上つてしまつた
もう私には何もない
私は自分の血と肉とを喰ふより
外に何ものをも有つて居ない。

渡舟

我等河岸に來りて佇みたり
前の舟いで行きて間もなからむ
舟は未だ返へり來らず
雨にぬれ待つこと久しければ

遠からぬ彼方の岸を望みて
われは聲高く呼びたり
されど如何にしけむ舟は來らず
ものさびしき雨景の中に
我等して待ちわび佇むことすでに久しきに及べり。
今は早や日も暮れなんとするに
伴なる女は寒さに戰きいでぬ
かくて佗しき夜は我等の上に來りぬ

わが渡舟を求むる心は絶えて
ひたすらに伴なる女をかき抱けど
われも亦あやしきゆめに襲はれつ
悲しき渡舟來らぬ彼方に眠入りたり。

氷を砕く

わが腕　氷を砕く
窓外に　枯葉おとずれ
はや師走なり

誰がために
わが碎く氷ぞも
おとめが熱に惱むにか
あらず
遠き　おとめが姉にぞや

わが腕　氷を碎く
わが指先は凍えたり

——早や五年の師走なり

誰がために
わが碎く氷ぞも
おとめの恙（うれひ）　痛心（いたみ）てか
（おとめの臥相あはれなり）
あらず
己が佗しをかこちてか

たなぐもる
み空も師走
いまはたゞひたむきに
わが腕　祈るが如く
砕くさゞほり。

吾等つねに知れるや

われらつねに知る
果てもなき曠野を
そを貫く凄じき
一條の河流るゝを